

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 CRIATIVA

1. 事業名称

地域と企業と行政の連携による多文化共生に資する地域日本語教育支援システム整備事業

2. 事業の目的

静岡県は日系人をはじめとする在住外国人が集住する自治体を多く抱えている。とりわけ浜松市は外国人のための日本語教育の充実にむけた努力はしているものの、企業や地域との連携はまだまだ進んでいない。生活者としての外国人が日本語を学ぶ環境を整えるためには、地域や企業、行政といった社会を構成する全ての機関と関係者が連携し協働することが求められる。こうしたことから、地域社会のすべての人々が連携・協働する日本語教室を開設し、その運営を行うことのできる日本語支援者としてのシステムコーディネーターとプログラムコーディネーターの育成を図る。これにより「生活者としての外国人のための日本語カリキュラム」を活用して日本語を教えるばかりでなく、教室をマネジメントできる人材が育成され、静岡県西部地域全体における地域日本語教育の充実を促進することを目的とする。

3. 事業内容の概要

地域日本語教育を事業化して推進する人材を育成し、その人材による日本語教室を開設する。この教室は、企業・行政・地域が連携し協働していく場とし、多文化共生社会の構築に資するものとする。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成 24 年8月1日 8:30～11:30	3時間	グローバル人財サポート浜松研修室	田村太郎、 神吉宇一、 川端一博、 堀 永乃	養成講座の内容検討	多文化共生に資する人材育成に向けたプログラムの内容と講師配置について具体案を取りまとめる
2	平成 24 年8月1日 14:00～16:00	2時間	グローバル人財サポート浜松研修室	田村太郎、 神吉宇一、 川端一博、 宮川勇、嶋田和子、河森佳奈子、 山下文彦、 堀 永乃	事業内容の検討	事業内容の検討と目標設定を行う
3	平成 25 年1月 11 日 10:00～12:00	2時間	グローバル人財サポート浜松研修室	田村太郎、 嶋田和子、 柳澤好昭、 山下文彦、 堀 永乃	事業の中間報告と教室設置について	事業の中間報告を行い、情報を共有化。修了者の教室設置に向けて方向性の確認を行う。
4	平成 25 年3月19日 10:00～12:00	2時間	グローバル人財サポート浜松研修室	田村太郎、 川端一博、 嶋田和子、 柳澤好昭、 山下文彦、 堀 永乃	事業報告と課題について	事業報告と汎用性に向けた課題整理を行う。

【写真】



5. 日本語教室の設置・運営

- (1) 講座名称 ビジネスで役立つ表現クラス
- (2) 目的・目標 日本語能力が上級レベルの外国人がビジネス面で役立つ表現を学ぶ
- (3) 対象者 日本語能力が上級レベルの外国人
- (4) 開催時間数(回数) 10 時間 (全 5 回)
- (5) 使用した教材・リソース
標準的なカリキュラム案、「できる日本語」(アルク)、CD、新聞記事、教師作成教材 他
- (6) 受講者の総数 3 人
(出身・国籍別内訳 イギリス1人、ブラジル1人、中国1人)
- (7) 受講者の募集方法
公益財団法人浜松国際交流協会の掲示板、
一般社団法人グローバル人材サポート浜松
- (8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ
1	平成 25 年2月8日 13:30~15:30	2 時間	グローバル人材サポート浜松研修室	3人	中国(1人)、ブラジル(1)、イギリス(1)	あいさつ、接客用語
2	平成 25 年2月15日 13:30~15:30	2 時間	グローバル人材サポート浜松研修室	3人	中国(1人)、ブラジル(1)、イギリス(1)	新聞記事
3	平成 25 年2月22日 13:30~15:30	2 時間	グローバル人材サポート浜松研修室	2人	中国(1人)、イギリス(1)	職場のルール
4	平成 25 年3月1日 13:30~15:30	2 時間	グローバル人材サポート浜松研修室	2人	中国(1)、イギリス(1)	同僚とのコミュニケーション、緊急時の電話
5	平成 25 年3月15日 13:30~15:30	2 時間	グローバル人材サポート浜松研修室	2人	中国(1人)、イギリス(1)	会議、販売の現場

(9) 特徴的な授業風景



(10) 目標の達成状況・成果

毎回受講者の振り返りを行い、学んだ内容の達成度を数値で表し、教室に対する評価と指導者への要望を記載して指導者へのフィードバックを行った。

(11) 改善点について

少人数制だったため受講者が学びたいという教室活動ができていたのがよかった。また教室の雰囲気はとても和やかであった。しかし、2人の講師・コーディネーターは授業内容と目標設定について、もう少し細かな打ち合わせやコンセンサスが必要だったように思われる。残念ながら、教室活動に地域の人や機関を巻き込むことがあまりできていなかった。可能ならば、ビジネスマンのゲストを迎えるなどしたら、もっとリアルで活気を生み出せただろう。

(1) 講座名称 目指せ、10点アップ作戦！

(2) 目的・目標

中学3年生を対象に、高校入試に向けた日本語学習支援を行い、高校入試において10点以上の得点アップを目指す。

(3) 対象者 江南中学校に通う中学3年生

(4) 開催時間数(回数) 12 時間 (全 4 回)

(5) 使用した教材・リソース

学校配布プリント、自作プリント

(6) 受講者の総数 3 人

(出身・国籍別内訳 ブラジル 3 人)

(7) 受講者の募集方法

浜松市教育委員会の協力により、江南中学校を紹介していただいて、直接江南中学校と交渉。江南中学校で中学3年生の教室で、チラシを配布。クラス担任が希望者を募った。

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍 (人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成 25 年 1 月 18 日 14:00～ 17:00	3 時間	江南中学校	3 人	ブラジル(3)	問題文を解く	学校の授業で配布されたプリントを読み解く
2	平成 25 年 1 月 19 日 14:00～ 17:00	3 時間	江南中学校	3 人	ブラジル(3)	問題文を解く	学校の授業で配布されたプリントを読み解く
3	平成 25 年 1 月 25 日 13:00～ 17:00	3 時間	江南中学校	3 人	ブラジル(3)	問題文を解く	学校の授業で配布されたプリントを読み解く
4	平成 25 年 1 月 26 日 14:00～ 17:00	3 時間	江南中学校	3 人	ブラジル(3)	問題文を解く	学校の授業で配布されたプリントを読み解く

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)





(10) 目標の達成状況・成果

浜松市教育委員会や学校にコーディネーター(大学生)が交渉して教室を開設できてよかった。大学生ボランティアの積極的な参加も得られ、大学生が外国籍児童に対する理解を深めたようだ。また、毎回参加者の振り返りを行い、中学生たちは学んだ内容の達成度を数値で表し、指導者のフィードバックを行った。全員、公立高校に合格。

(11) 改善点について

大学生は社会経験が未熟なため、交渉時の対応など、事前に指導が必要な場面もあった。学校側としては、安心・安全な受け入れ姿勢を築くためにも、大学生との信頼関係を作るための時間をもう少し丁寧に作る必要があった。

(1) 講座名称 愛される日本語教室

(2) 目的・目標

日本語能力が初級レベルの日本人の配偶者(妻)が、日常生活の日本語を学び、家族(嫁姑関係)や近所の人との人間関係を良好にしていく。

(3) 対象者 日本人等の配偶者(妻)

(4) 開催時間数(回数) 12 時間 (全 6 回)

(5) 使用した教材・リソース

標準的なカリキュラム案や「できる日本語」(アルク)を活用したオリジナルプリント

(6) 受講者の総数 8 人

(出身・国籍別内訳 中国(台湾含む) 5人、ブラジル 2人、ネパール 1人)

(7) 受講者の募集方法

浜松市多文化共生センターのコミュニケーションボード掲示、西部パレットでのチラシ配布、フィリピンパブでのチラシ配布、ハローワーク浜松外国人相談コーナーでの相談員による広報と配架

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成 25 年 2 月 13 日 11:00~13:00	2 時間	グローバル 人材サポ ート浜松	0 人		話しやす い人になろ う	相手に良い印象を与え る態度、目線を考がえ る。受け答え、あいづち を教える。
2	平成 25 年 2 月 20 日 11:00~13:00	2 時間	〃	0 人		〃	〃
3	平成 25 年 2 月 27 日 11:00~13:00	2 時間	〃	3 人	中国(3 人)	買い物を する	ひらがな(濁音)、漢字 (スーパーで見る)/スー パーで買い物をする時 の質問の仕方を教える
4	平成 25 年 3 月 6 日 11:00~13:00	2 時間	〃	7 人	中国(5 人)ブラ ジル(1 人)ペル ー(1 人)	乗り物に 乗る	ひらがな(半濁音)、漢 字(駅で見る)/ 駅で乗 り物に乗る時の質問の 仕方を教える
5	平成 25 年 3 月 13 日 10:00~12:00	2 時間	〃	6 人	中国(2 人)台湾 (1人)ブ ラジル(2 人)ネパ ール(1 人)	スケジュ ール①	【カタカナ】友達の名前 が読める。【漢字】曜日 がわかる。【やさしい日 本語】公共施設に開館 時間や休館日などを問 い合わせることができる。
6	平成 25 年 3 月 20 日 11:00~13:00	2 時間	〃	4 人	中国(2 人)ブラ ジル(1 人)ネパ ール(1 人)	スケジュ ール②	【カタカナ】国名が読め る。【漢字】朝、昼、晩、 夜、毎日、何、時、分の 習得 【やさしい日本語】 日常生活について話し たり質問したりすること ができる。

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)



(10) 目標の達成状況・成果

毎回受講者の振り返りを行い、学んだ内容の達成度を数値で表し、教室に対する評価と指導者への要望を記載して指導者へのフィードバックを行った。

(11) 改善点について

当初フィリピン人パブで働く日本人の配偶者のフィリピン人女性を対象にしていたが(事実、ニーズは確実にあった)、残念ながら実際に受講者が全く集まらなかった。そこで、チラシの表現を工夫して配布したところ、フィリピン人ではなく中国人女性が多く集まった。また、ハローワークを通して教室が周知され、終盤には男性の参加も受け入れることになり、情報が的確に伝われば、その学習ニーズを抱えている受講者は集まることが明確となった。運営する側には、広報活動の具体的な工夫について事前に学んでおくことや、ニーズがあるにも関わらず結局受講者が集まらなかった理由をきちんと分析し、課題解決に向けた振り返りが必要である。

(1) 講座名称 外国人研修生のための日本語教室

(2) 目的・目標

外国人研修生が浜松市や近隣地域においてQOL(生活の価値)を高め、日本での研修生活を充実させ、社会活動に積極的に参加できるようにする。また、日本の伝統的な文化を知り、日本人との交流を深める機会とする。

(3) 対象者

外国人研修生 15名

(4) 開催時間数(回数) 14 時間 (全 5 回)

(5) 使用した教材・リソース

オリジナルプリント、浜松市内観光パンフレット、日本文化(お茶、書道、折り紙)

(6) 受講者の総数 27 人

(出身・国籍別内訳 タイ 8 人、インドネシア 10 人、ベトナム 4 人、日本 5 人)

(7) 受講者の募集方法

研修生受け入れ機関であるアイムジャパンを通じた告知、西部パレットでのチラシ配架、SNS(フェイスブック他)、郵便局でのチラシ掲示

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成 25 年 2 月 10 日 14:00～ 16:00	2 時間	静岡県 西部交流プラ ザ パレ ット	1 人	インドネシ ア(1 人)	自己紹介(日 本人と友だち になろう！節 分を知ろう！)/ 節分・折り紙	研修生の国の文化と日本の文 化の違いを比較しながら自分 の国の紹介ができる。 日本人に興味を持ってもらえ るような自己紹介ができる。
2	平成 25 年 2 月 24 日 14:00～ 16:00	2 時間	静岡県 西部交流プラ ザ パレ ット	6 人	インドネシ ア(2 人)、タ イ(2 人)、 ベトナム(2 人)	自己紹介/丁 寧な会話・友 だち同士の会 話/日本の歌 (ふるさと・朧 月夜)	丁寧な会話、友だち同士(普 通)の会話の違いがわかり、 使い分けができるようになる。 人間関係のきっかけをつくる 挨拶ややり取りができるように なる。
3	平成 25 年 3 月 3 日 13:00～ 16:00	3 時間	静岡県 西部交流プラ ザ パレ ット・松 韻亭	8 人	インドネシ ア(2 人)、タ イ(5 人)、 ベトナム(1 人)	友だちを誘っ てみよう！/お 茶会に参加 (煎茶)	友だちを誘って、一緒に何か をする約束をすることができ る。相手が都合がつかかなか った時の対応、また次の約束を 提案してみる時の会話につい て。
4	平成 25 年 3 月 10 日 14:00～ 16:00	2 時間	グロー バル人 財サポ ート浜 松	7 人	インドネシ ア(2 人)、タ イ(5 人)	バスで出かけ よう！(座学 編)/書道(色 紙作り-好きな 漢字一文字))	大勢の人と行動を共にする時 に使う言葉。指示をしたり、指 示を理解して行動することが できる。状況に応じて質問等を することによって他の人と円滑 なコミュニケーションをとる。目 的地までの道順を説明し友人 を誘導することができるように なる。

5	平成 25 年 3 月 17 日 12:00 ～17:00	5 時 間	グロー バル人 財サポ ート浜 松・ 竜々岩 洞	2 7 人	ベトナム(4 人)、インド ネシア(2 人)、タイ (14 人)、日 本(7 人)	バスで出かけ よう！(実践 編)	前の週までに勉強した言葉を実際に使って、日本人、自分の国以外の人たちとコミュニケーションを取り、友だちになる。
---	--	----------	--	-------------	--	------------------------	---

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)



(10) 目標の達成状況・成果

毎回受講者の振り返りを行い、学んだ内容の達成度を数値で表し、教室に対する評価と指導者への要望を記載して指導者へのフィードバックを行った。

また、最終回で、バスツアーを自分たちで企画し、日本人の大学生ボランティアや友人などに声をかけ、行動を共にする活動では、参加者全員から大変満足したという声を得た。また、この教室活動後、花見をする企画を外国人研修生が企画し、日本人に声をかけ始めるなど、実践的な成果を見受けることができた。

外国人研修生への告知方法は、口コミと明確なゴールを表示されたチラシであることが明確となった。

(11) 改善点について

外国人研修生と課外活動をする際は、行き先を「知っている」ということに過信せず、地図を使うなど視覚的に説明を工夫し、情報提供をする必要がある。また双方の連絡先の交換もしておかなければならない。付き合いの浅い関係性のなかで個人情報の相互提供に対し、慎重な考えを持つことも必要である。コーディネーターはSNSに抵抗感や不信感を持っているとSNSでの活動を取り入れることに抵抗を感じていた。一方、大学生や研修

生はSNS(フェイスブックやLINE など)を使って交流をすることに抵抗はない。しかも外国人研修生の多くは、広い交友関係の構築を希望していること、そして日本語の学習ニーズもSNSで使えるようになることであった。今後は、交友関係を広げる目的の情報を発するための日本語を学んでからのフィードバックについて、その手法を考慮していく必要がある。

(1) 講座名称 命を守る日本語教室

(2) 目的・目標

東海大震災に備え、太平洋沿岸地域にある遠州浜団地と中田島団地の外国人住民に対し、災害時に必要となる日本語を学び、情報弱者とならず命を守る活動を自発的にできるようにする。

(3) 対象者 浜松市南区中田島団地、遠州浜団地に住むブラジル人

(4) 開催時間数(回数) 12 時間 (全 6 回)

(5) 使用した教材・リソース

HUG(避難所運営ゲーム)、三重県災害時多言語情報カード、災害時の「やさしい日本語」(静岡県)、プロジェクター、AEDなど

(6) 受講者の総数 15 人

(出身・国籍別内訳 ブラジル14人、日本3人)

(7) 受講者の募集方法

中田島団地自治会、遠州浜団地自治会を通じた広報および住民へのポスティング活動

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成 25 年 2 月 12 日 19:00～21:00	2 時間	五島 公民館	13 人	ブラジル(10)、ペルー(3)	災害が起きる前に／基本的な知識と言葉の紹介	津波が起きる理由及び事前準備について
2	平成 25 年 2 月 19 日 19:00～21:00	2 時間	五島 公民館	12 人	ブラジル(11)、ペルー(1)	東海地震、避難サイレン、屋内避難方法	防災についての DVD を鑑賞後、震災直後の行動を学習。最後に防災士による質問応答。
3	平成 25 年 2 月 26 日	2 時	五島 公民館	9 人	ブラジル(9)	屋外での安全確保、避難方	速報ニュースの漢字、避難時の優しい日本語を学習し、時

	19:00～21:00	間	館			法や適切な行動を学習	間帯による家族の避難方法について学ぶ
4	平成 25 年 3 月 5 日 19:00～21:00	2 時間	五島公民館	11 人	ブラジル (11)	災害が起きた後に 安全確保・避難・救出・救護の時に必要になる言葉	災害時の応急手当の必要性を学んだあと、消防士と救命士による AED や心肺蘇生、人口呼吸の方法を学習。119 番ロールプレイング。
5	平成 25 年 3 月 12 日 19:00～21:00	2 時間	五島公民館	14 人	ブラジル (10)、日本 (4)	避難所での生活に関する知識、必要になる言葉、会話	強い地震直後の高台への避難方法。避難場所の再確認。HUG ゲームによる避難所の運営を体験。防災士による質問応答。
6	平成 25 年 3 月 19 日 19:00～21:00	2 時間	五島公民館	12 人	ブラジル (9)、日本 (3)	新しい津波警報速報によく使われる漢字。大切な言葉の振り返り	テレビ画面の緊急速報に出てくる漢字を学習。総合的な復習。

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)



(10) 目標の達成状況・成果

毎回講師・コーディネーターは授業後振り返りミーティングを行い、課題と情報の共有化を計り達成状況をみてきた。

コーディネーターがブラジル人で、同じ地域住民の当事者であることから、ブラジル人の積極的な参加が促せた。

自治会会長および保護司の協力を得て、今後自治会事業として公民館利用を提供してもらえるようになった。また、地元住民の大学生や社会人が自発的に参加した。白脇消防署の協力により消防士・救命士が講師として参加することで外国人住民と知り合う機

会を設けることができた。このように、本講座は十分に地域に関わる多様な人・機関を巻き込むことが可能となった。

(11) 改善点について

広報チラシがポルトガル語版のみであったため、地域住民にもっと広く周知する方法が十分に取れなかった。また、受講者が日本語を学ぶもののコーディネーターの通訳に頼ってしまう傾向もあったため、日本語を使うというアウトプットの活動をもっとさせていかなければならなかった。そのため講師には効果的なアプトプット活動を意識して指導に携われるよう指導が必要だった。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称 地域日本語教育「起業家」育成講座

(2) 目的・目標

地域日本語教育を事業化して、地域・企業・行政の連携・協働を促進し多文化共生社会への構築に資する日本語教室を運営できる人材を育成する。

(3) 対象者 日本語教育に携わりたい人など20人

(4) 開催時間数(回数) 69 時間 (全 38 回、うち1回合同)

(5) 使用した教材・リソース

講師作成PPT、標準的なカリキュラム案、ニーズ調査結果、受講者事前調査 など

(6) 受講者の総数 11 人

(出身・国籍別内訳 日本10人、ブラジル1人)

(7) 受講者の募集方法

静岡県国際交流協会機関誌、浜松国際交流協会機関誌ならびにチラシ配布、西部パレット・市民協働センター、日本語教育学会でのチラシ配布

(8) 養成・研修の具体的内容

【基本コース】

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成24年 9月29日 13:00~17:00	4時間	グローバル人財サポート浜松研修室	9人	日本(7)、ブラジル(1)、ペルー(1)	日本概論	グローバル化と人口変動から、多文化共生は日本の未来を作る重要な取り組みであることを学ぶ。
2	平成24年 10月6日 13:30~	3時間	グローバル人財サポート浜松研修	7人	日本(6)、ブラジル(1)	移動する外国人	人はなぜ移動するのか、その背景と効果・課題について学ぶ。

	16:30		室				
3	平成 24 年 10 月 20 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	8人	日本(7)、ブ ラジル(1)	地域の現 状分析	受講者の市町村の状況を調べ、分 析し、現状がどのようなものなのか を把握し、これから自分たちが何を しなければならないのかを考える。
4	平成 24 年 10 月 27 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	7人	日本(6)、ブ ラジル(1)	行政・企 業・市民 の取り組 み	浜松市の取り組みと三井物産の取 り組みから、行政や企業の視点に ついて知り、市民として何ができる のかを考える。
5	平成 24 年 11 月 3 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	7人	日本(6)、ブ ラジル(1)	コーデ イナー の役割	地域を構成する人や機関をどのよ うに結び付けて、地域課題の解決 を図るのか。また事業の課題をど のように解決していくのか、そのノ ウハウを学ぶ。
6	平成 24 年 11 月 10 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	7人	日本(7)、ブ ラジル(1)	外国人の 声を聞く	外国籍児童として学習支援を受け てきた元学生と後輩外国人の生活 支援に携わるリーダーのお話か ら、外国人が置かれている状況を 理解する。
7	平成 24 年 11 月 17 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	6人	日本(5)、ブ ラジル(1)	教室の目 標と意 義・企画 立案	これまでの講義から、自分たちは どのような教室を事業として立案し ていくべきか。教室を設置するため のノウハウを学ぶ。
8	平成 24 年 11 月 24 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	8人	日本(7)、ブ ラジル(1)	ニーズ分 析・課題 分析	地域日本語教育における学習者 の背景やニーズについて学び、 「生活者」としての外国人のための 日本語カリキュラム案を活用し、コ ースデザインを考える。
9	平成 24 年 12 月 1 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	8人	日本(7)、ブ ラジル(1)	社会リソ ース・地 域リソー スを考え る	地域を構成する人や機関を巻き込 んだ様々な事例から自分が考える 教室にどのようなリソースを活用す ると効果が得られるのかを考え る。

10	平成 24 年 12 月 8 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	7人	日本(6)、ブ ラジル(1)	異文化理 解	我々の生活は常に異文化との接 触であるということをワークショップ を通して体感し、異文化な相手に 対するアプローチの手法について 学ぶ。
11	平成 24 年 12 月 15 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	6人	日本(6)、ブ ラジル(1)	ボランティ アマネジ メント論	そもその「ボランティア」とは何か？ プロボノの本来の意味と自分たち の活動の位置づけ、目標について 改めて考え、理解者を増やす方法 について探る。
12	平成 24 年 12 月 22 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	7人	日本(6)、ブ ラジル(1)	地域を巻 き込む活 動を考え よう	外国人児童の学習支援者、外国 人の医療支援者、外国人の就労 支援者の多様な機関と協力者を得 た事例から実践的な活動について 学ぶ。
13	平成 25 年 1 月 12 日 1 3:30～1 6:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	8人	日本(7)、ブ ラジル(1)	ファシリテ ーションを 学ぶ	仲間を動かすファシリテーションの 手法についてワークショップを通し て具体的に学ぶ。
14	平成 25 年 1 月 19 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	6人	日本(5)、ブ ラジル(1)	プレゼン テーション をしてみ よう	日本語教育を地域に拓くには？を テーマに、自分の事業について協 力を要請するためのプレゼンテー ションについて学ぶ。
15	平成 25 年 1 月 26 日 13:30～ 16:30	3 時 間	グローバル 人財サポー ト浜松研修 室	6人	日本(5)、ブ ラジル(1)	先輩社会 起業家に 学べ！今 こそ社会 の課題を 解決しよ う	先輩起業家が起業した理由とその 事業について知り、後進となるべく 必要な心構えを学ぶ。

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

●日本概論

講師：田村太郎氏(NPO法人多文化共生センター大阪代表理事)

グローバル化が進むなか、世界レベルでの人口変動と多文化共生施策の状況を知り、少子

高齢化の日本の現状を考えると多文化共生施策が喫緊の課題であることと、その重要性について理解を深めることができた。



●ボランティアマネジメント論

講師：田村太郎氏（NPO法人多文化共生センター大阪代表理事）

「ボランティア＝無償」ではなく、「ボランティア＝自発的に社会的課題を解決する人」であることと、さらに「したいことをする」のではなく「しなければならないことをする」という姿勢が必要であることを学ぶ。同好会や趣味ではなく、外国人との共生が地域の課題を解決する重要な取り組みのなかに日本語教育支援活動があることを改めて考えることができた。多文化共生推進のためにも地域のニーズをきちんと把握した日本語教育を進められなければ、地域の今後がない！という力強い言葉に多くの受講者が感銘を受けた。この考え方がすべての地域日本語教育に携わる人たちに伝われば、「ボランティア」なのか「教師」なのかという対立思考は間違いなくなくなるだろう。



（10） 目標の達成状況・成果

外部有識者による受講者の教室設置にかかる活動とその成果の分析による客観的な評価。

（11） 改善点について

受講者の横のつながりをもっと早々に構築しておくべきであった。受講者が同じ目標を掲げられるよう対話の時間を設けていく必要もある。また、広報活動においては、PCスキルの課題もあった。本来地域日本語教育は地域づくりを意識したものでなければならぬため、コーディネーターにはまわりを巻き込むスキルも求められる。そのため、コー

ディネーターには、協力者を呼びかけて周りを巻き込む手法について学び、それぞれにどのような手続きが必要なのかなど、もう少し丁寧に指導していく必要があった。また、プログラムコーディネーターには、アウトプットの活動を効果的に行える知識と技術の習得する時間を次のステップとして設けていくことが望まれる。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

- (1) 教材名称 地域日本語教育を推進する事業運営者育成プログラム
- (2) 対象 自治体の多文化共生を進める担当者や国際交流協会の事業担当者等
- (3) 目的・目標
生活者としての外国人を対象とした日本語教育を事業化して推進することのできる人材を育成するためのノウハウを形にすることで、地域の多文化共生づくりに活かす。
- (4) 構成
基本コース
プログラムコーディネーターコース
システムコーディネーターコース
教室設置
- (5) 使い方
日本語ボランティア教師養成講座でのコースデザインとして活用する
- (6) 具体的な活用例
地域において多様な日本語教室を設置していくことのできる人材を育成したい場合は、システムコーディネーターコースを地域に合わせて開講する。多様な人が関わりあう活動を生み出す日本語教室を運営することのできる人材を育成したい場合は、②プログラムコーディネーターコースを地域に合わせて開講する
- (7) 成果物の添付

8. 事業に対する評価について

- (1) 事業の目的
静岡県は日系人をはじめとする在住外国人が集住する自治体を多く抱えている。とりわけ浜松市は外国人のための日本語教育の充実にむけた努力はしているものの、企業や地域との連携はまだ進んでいない。生活者としての外国人が日本語を学ぶ環境を整えるためには、地域や企業、行政といった社会を構成する全ての機関と関係者が連携し協働することが求められる。こうしたことから、地域社会のすべての人々が連携・協働する日本語教室を開設し、その運営を行うことのできる日本語支援者としてのシステムコーディネーターとプログラムコーディネーターの育成を図る。これにより「生活者としての外国人のための日本語カリキュラム」を

活用して日本語を教えるばかりでなく、教室をマネジメントできる人材が育成され、静岡県西部地域全体における地域日本語教育の充実を促進することを目的とする。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

- 教室に巻き込むことのできた機関と人の多様性
- 外国人受講者・日本人協力者や参加者の人数とアンケートから満足度を図る
- 講座最終回に外国人受講者から続けたいという意思表示があったかどうか
- 外部評価員からの客観的な評価コメント

以上 4 点から、取り組み2を受講して修了した人材が企画運営した日本語教室が事業化され、多様な人や機関を巻き込めたかどうか判断した。結果、ほとんどの教室が多様な人・機関(企業・学校・地域)を巻き込むことができていた。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

コースデザインをする際にカリキュラム案を活用。外国人住民へのヒアリングやアンケート調査からニーズを把握し分析する際に、外国人住民が何を学びたいのか、日本語を使用した生活上の行為のなかでどのような場面での行為が学びたいのか、具体的に考えるうえで役立った。

外国人が日本人との良好な人間関係の構築が目的であった場合の日本語教室で、カリキュラム案を活用して教室活動を考案するとした場合、一般的な支援者は「人とのかかわる」項目を見る。すると項目が「人とのあいさつ」に特化されているように思われるだろう。「他人の感想を聞く、自己の感想を話す」といった行為を盛り込むといい。要は、アレンジができるかが大切なのだが、このカリキュラム案をいわば料理本のようにして使用するなら、アイデアが豊富で工夫ができるような人でないと活用できないのではないだろうか。このまま参考資料として教室活動例を使用していくのはいいが、発展的な活動が期待できるようにしていく必要がある。また、日本語教育を広く国民に理解してもらう事業にしていくなめには、市民レベルで拓かれていかなければならない。そのためには、多様な人や機関の具体的な巻き込み方法を記載することが望ましい。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

本事業では、企業・行政・地域(当事者)がそれぞれに講師や協力者として携わった。これにより一つのことに對する多様な人との連携・協働を生み出すことができた。また、地域に教室を開いた際、その地域の自治会から「日本人住民も加えたうえで、自治会の事業としてもやっていきたい」という声が出たことは大きな成果と考える。

(5) 改善点、今後の課題について

日本の少子高齢化から労働力・生活力・経済力のすべてにおいて、地域はその地域に住む

外国人の力を活かすことを考えていかなければならない。多文化共生施策は地域の生き残り活動として当然の活動なのである。すると、日本人と外国人とのコミュニケーションツールとして、日本語は必須の課題となる。それは外国人の日本語学習ばかりを問題視するのではなく、日本人の日本語使用能力や配慮の不足も課題として解決していかなければならない。そこで、双方の良好な人間関係の構築のためにも地域の日本語教育は大きな位置を担っている。つまり、日本語教室は地域全体が連携し協働して行っていく社会的活動であることが大切だからである。そこで、日本語教室は様々な機関と人との連携・協働の場として機能していくよう、地域に拓かれていくようにしていかなければならないのだが、いまだそれを担う人材が少ないのが現状である。日本語を教える人はいても、日本語で活動することを促す人が乏しいため、今後はそういう人材の育成マニュアル(キャリア教育)の作成が必要である。そして、人材の育成には時間と費用がかかるため、長期的な展望で後方支援ができる専門的な機関も求められるのではないだろうか。

(6) その他参考資料